読売俳壇

矢島渚男 選

レプリカの回天に散る桜かな　松江市　三方　元

【評】「回天」はいわゆる人間魚雷で日本軍が先の戦争末期に敗勢を逆転させようと作った生きて帰れぬ自爆兵器。この句、展示されているのが模造品であることが更に切ない。

手に掬へば花屑などと捨てきれず　下関市　粟屋　邦夫

【評】この感情はよく分かる。美しい瑞々しい花びらをわが物としたかのような愛着が感じられ、なかなか捨てきれないものになる。

若草や山羊の初乳を風呂に混ぜ　神戸市　西　和代

【評】山羊の初乳をこのように使う風習があるのだろう。さてどのような効果があるか。美容的効果なら捨てられるようなもの。

夏夕焼け明日はどんな目眼薬さす　仙台市　内海　恵子

風光るまだ見ぬものを探す旅　佐野市　田中　礼子

花に歩く言問橋の川堤　龍ケ崎市　小宮　光司

追いかけて追いかけられて花の土手　京都市　根来美知代

木洩れ日の心地よき日よ蓬取り　加古川市　角谷　和子

菜の花や昔語りを日暮れまで　尼崎市　原　すずえ

畑打つ土塊を手でほぐしつつ　大分市　加藤　元二

高野ムツオ 選

大仏の厚き瞼の長閑かな　志木市　谷村　康志

【評】屋外に鎮座している大仏。春日をたっぷり浴びて、いつもより瞼がぼってりしている。今日の安らかな時間は、阿弥陀仏のこの瞼の賜物とふと気がついた。

真ん中の辺りが見えず凧の糸　大阪市　今井　文雄

【評】かなり高く揚げたのだろう。凧に視線を集中しているうちに凧が糸を離れて一人で揚がっているような錯覚にとらわれたのである。

相双の町を見守る桜かな　福島市　引地こうじ

【評】「相双」は東日本大震災の原発事故で避難を余儀なくされた福島沿岸地域。それぞれの町の桜も花開いた。未来を心配するかのように。

花の雨電車軋みて現れし　東大和市　神山　文子

オルガンの調べ溶けゆく春霞　春日部市　中沢　泰三

鳥帰る遺骨を探すその上を　高松市　島田　章平

水音も亦花冷をつのらする　香川県　福家　市子

畑待つや一緒に打たうと妣の鍬　秋田市　斉藤　千哲

飛燕一閃藍染の藍絞る　出雲市　石原　清司

ふるさとのあの公園の半仙戯　香芝市　河野　嘉雄

正木ゆう子 選

不意に来て大麦の穂に花見たり　東京都　松永　京子

【評】同時に「夫逝きて客見送れば春の月」も届いた。当欄に長年投句しておられるご夫婦。こんな時も作者に俳句があって良かった。今回の句にはまた別の不思議な趣がある。

四月馬鹿振りしてあげる夫は亡く　和歌山県　平尾　晴美

【評】下手な嘘と、騙されたふりが楽しかったエープリルフール。でももうあなたは居ない。二人の優しい関係性がかいま見える中七が素敵。

不足した野菜補うふきのとう　和歌山市　木下　淳

【評】ほんらい、蕗の薹は栄養摂取というより、季節の楽しみに少しだけ食べるもの。しかし野菜高騰の昨今、この句は半分本気である。

鎮火して笑ふ山なし瓦礫積む　大船渡市　桃心地

遠くへと近づいてゆく花筏　北本市　萩原　行博

鳴き通すしかなき雨の仔猫かな　浜松市　久野　茂樹

ネモフィラや今日その色の海と空　神栖市　菊地　晴美

妻は病み独り暮らせば花吹雪　新発田市　松田　正信

帽子より桜ひとひらめはり寿司　山口市　稲村みどり

チューリップ蜜蜂もぐり蜘蛛ひそむ　京都府　山田　国雄

小澤　實 選

オーブンの中拭き上げて桜時　八戸市　夏野あゆね

【評】オーブンの中を拭き上げてきれいにしてみた、ちょうど桜の咲く頃だったと、いうわけだ。取り合わせた季語が直接関係性が無く、どこか響き合うのがいいのだ。

タッパーにチャーハンぱんぱん新社員　横浜市　岡　一夏

【評】新社員がタッパーにチャーハンをしっかり詰めて来て、弁当にしているのだ。新社員のやる気をぱんぱんにしたタッパーがものがたる。

立ち上がる湯船の波も長閑なり　大野城市　野分　のわ

【評】湯船の中で立ち上がってみた、その際に生まれた波も、どこかのどかな感じがした、というわけだ。昼の明るいうちの入浴という感じ。

卓袱台の立て掛けてある立夏かな　川崎市　神谷たくみ

温泉を運ぶトラック春暑し　小諸市　藤　雪陽

春の蚊やこども食堂開店す　加古川市　石村　まい

読み終へし本は売りけり花は葉に　尾張旭市　小野　薫

スカーフのパステル色や花の冷え　三田市　依藤あかね

律も吾も道後に長湯春の雲　流山市　高橋　郁代

煮卵の半熟具合春の雲　前橋市　山本　亨

俳句あれこれ　津川絵理子（俳人）　俳句の道草 ②

去年蒔いた柚子が芽を出した。いい加減に植木鉢に種を埋めたので、芽が出ると却ってびっくりする。

時々気まぐれに種を蒔く。たとえば柿を食べたあとのとか、拾ってきた林檎のとか。水遣りはしたが、芽が出るとは思っていなかった。けれど数年経った今では、木の姿になって、若葉を吹いている。林檎と柿に、狭いベランダが占領されつつある。

植物が種から芽を出すのは当たり前のようでいて、本当は奇跡なのかもしれない。小さな種に全てが詰まっているなんて、実に不思議だ。

ベランダには他に、コーヒーの木、カプセルトイの仙人掌、菊花展で買ったミニ盆栽などがある。菊は春になると新芽を出す。それを根分けして、新しい鉢に植え替える。そうして秋になるとまた花が咲く。自分でやってみて、「菊根分」という春の季語がぐっと身近になった。季語を実践するのは楽しい。

題字デザイン・イラスト　福田美蘭